

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 丸 尾 貴 志

論 文 題 目

Laryngeal sensation and pharyngeal delay time
after (chemo)radiotherapy

((化学)放射線療法後の喉頭感覚と喉頭挙上遅延時間)

論文審査担当者

主 査
委 員

名古屋大学教授

若林 俊彦



委 員

名古屋大学教授

祖父江 元



委 員

名古屋大学教授

亀井 護



指 導 教 授

名古屋大学教授

仲 島 裕



論文審査の結果の要旨

咽喉頭癌における(化学)放射線治療は臓器温存率を向上させるが、治療後の嚥下障害が問題となる。(化学)放射線治療による嚥下障害の要因として、組織瘢痕による運動障害、粘膜炎による感覚障害などがあげられる。喉頭への放射線治療により明らかに喉頭感覚が低下する事はこれまでの報告で示されている。本研究では13例の症例を対象として治療前と治療後の喉頭感覚検査と嚥下造影検査を比較し、感覚低下がもたらす影響を嚥下反射惹起遅延時間(PDT)、舌骨の移動距離、舌骨急速挙上相速度、咽頭残留量、penetration-aspiration scoreをパラメーターとして評価を行った。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 本研究において喉頭への(化学)放射線治療により喉頭感覚は低下するが、嚥下反射の惹起遅延は起こらず、機能も保たれていた。しかし、喉頭感覚が高度に低下した症例では誤嚥性肺炎を起こしており、気道防御反射の低下が予想される。治療前の嚥下評価により、加療後の状態を予測する事ができ、それをもとに早急な対応が可能となる。
2. 疾患を持たない正常人のデータと比較すると、本研究のデータは疾患や年齢の影響を受けており、PDT、舌骨の移動距離において、正常よりも劣る結果となった。
3. 腫瘍の局在、年齢は嚥下機能に大きく影響する。腫瘍の占める範囲が大きくなれば、その分正常な組織が少なくなり、機能も低下する。年齢が若ければ、低下した感覚や運動性に対する代償がされやすいが、高齢になると代償がされにくくなり、治療の影響が反映されやすくなる。今回の検討では、早期の喉頭癌・下咽頭癌症例が多かったため、放射線照射範囲が限局し、嚥下運動に関係する筋肉などへの影響が抑えられた事、また、比較的若い症例が多かった事が、治療後の嚥下機能が比較的保たれる結果となった要因と考えられる。

本研究は、(化学)放射線治療により生じた嚥下障害の病態解明に、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士(医学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	丸尾貴志
試験担当者	主査	若林俊彦	相文元	亀井讓
	指導教授	仲島務		

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 今回の結果の臨床応用について
2. 正常人のデータとの対比について
3. 病変の局在部位、年齢の影響について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、耳鼻咽喉科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。